

宮崎県の生活綴方教師・木村寿 (三)

—— 土々呂の詩 ——

菅 邦男

一、文集『光』と全国誌

(一) 綴り方倶楽部

木村寿の指導作品が、恐らく最も多く掲載されたのが、千葉春雄が発行していた『綴り方倶楽部』である。千葉春雄との出会いが木村寿の綴方教育に大きな転換をもたらしたことは、既に述べた通りである。

『綴り方倶楽部』昭和九年五月号の「文集廻国」には、「全日本綴り方倶楽部連盟」が作られたことが紹介されている。そこには、「宮崎」にも「全日本綴り方倶楽部連盟」の支部が出来たことが記されている。

「それから、こゝでいつておきたいことは、いつの間にか、こちらに『全日本綴り方倶楽部連盟』といふものが出来上つたことだ。若い気力ある人々の研究団体である。それと呼応して、宮崎に、福岡に、長崎に、島根に、宮城にと、それぐゝ同種の団体が出来上つたやうだ。やがて正道綴り方が、全日本を縦断して、実力と実質との堅塁を築くことゝならう。愉快な話である。」

これによると、宮崎県に支部ができたのは、昭和九年の五月頃のことである。太郎良信氏の「全日本綴り方倶楽部支部一覧」(『生活綴方教育史の研究』教育史料出版会)には、宮崎支部の責任

者として木村寿の名前が見える。所屬、即ち事務局は「宮崎県門川校」である。支部結成年月日は、一九三五年(昭和十年)一月以前となっている。木村寿が門川小学校に居たのは、昭和十年度の一年間のみである。昭和十年一月、即ち昭和九年度は土々呂小学校勤務である。したがって支部成立は土々呂小学校時代であり、昭和九年に支部が成立したことは間違いない。長崎と島根に関する記述はないが、宮城は昭和九年三月二十七日に支部成立となっている。しかし福岡支部は同年九月九日とあるから、「文集廻国」に挙げられた五県がすべて五月までに成立したと言い切れない。宮崎県支部が正式に発足した年月日は分からないが、少なくとも宮城や福岡と同じ頃には成立していたのだと思われる。

いづれにしろ、木村寿と『綴り方倶楽部』(千葉春雄主宰)の関係は深く、木村は同誌を通して、全国的に名を知られるようになるのである。

昭和八年の『綴り方倶楽部』十月号では、「文集廻国6」に千葉春雄が『ひかり』をとりあげている。

「ひかり 第十三号、宮崎県東臼杵郡土々呂小学校尋二 木村寿君の編集である。もう日本的になつた文集であるから、多くの人々にも期待されてゐると思ふが、この文集位、子供にとつて無駄がなくといふよりは、ほんの一字でも、最大有効に記されてゐるのは、他

にない。木村君が、如何に実践に深入りし、子供に親炙してゐるかを、たゞこの文集一冊で十分に証明してゐる。文もよい、詩もよい、そしてどの文でも、子供の性向によくついでゐる。よくかうも確かに子供が文の上になり得るやうに指導したものだと思ふ。それでゐて綴り方の傾向を指導者は実によくつかんでゐる。何の理屈もないが、小さい言葉に、文の分類に、余白の理草に、後記に、千万語の理論にまさる実践上の生きた箴言が、平凡にしかも有力に語られてゐる。木村君は太陽を凌ぐやうになつたぞと叫びたくなる。」

昭和八年の半ばには、『ひかり』は全国的に知られる文集になつていたことが分かる。それにしても、大変な褒めようである。このように評価された『ひかり』であつたから、当然『綴り方倶楽部』に掲載される作品も多かつた。

青木幹勇氏は、「文集『ひかり』『光』は、全国に知られ、月刊『綴り方倶楽部』には、ほとんど毎月のように、その巻頭に、木村学級の子どもたちの、ユニークな作品（詩・作文）がのせられていました。」（『わたしの授業』）と言つてゐる。かなりの数の作品が掲載されたようである。

『綴り方倶楽部』も現存しているものは少なく、目にするのが出来るのはごく一部である。したがつてどれだけ数の作品が掲載されたのか、具体的なことは分からない。しかし、その限られた中にも、土々呂小学校の作品は少なからず見ることが出来るのである。

『綴り方倶楽部』は昭和八年四月の創刊であるが、同年六月号には既に土々呂小学校の綴方が掲載されている。創刊号や第二号を見ることが出来ないで、これが同誌に掲載された最初の作品がどうかは分からない。しかし土々呂小学校の作品がかなり早い段階から同誌に掲載されていたことは、これによつて明らかである。

六月号も、雑誌そのものを見ることは出来なかつた。雑誌『教育・

国語教育』（昭和八年六月号）に載つた『綴り方倶楽部』の広告によるものである。散文篇の所に「ネコ 宮崎・土々呂校 尋一 高橋忠男」とある。文集『ひかり』第五号に載つた作品である。

※昭和八年六月号

ネコ 宮崎・土々呂校 尋一 高橋忠男

ネコ

高橋忠男

ネコ ガ ニヤン ト ナキマシタ。 マタ ウチ ノ トナリノネ
 コ ガ キテ ケンクワ ヲ シテ キマシタ。 ソノ ニヒキノ
 ネコ ガ ニヤン ニヤン ト ケンクワ ヲ ハジメ マシタ。
 アンマリ ハバシカリ ワタクシ ハ ヒツタマガリ マシタ。 ネ
 コ ヲ オヒマシタ。 ネコ ハ ニゲマシタ。 ニヤン ト ナイテ
 ニゲマシタ。 ポンポン ト トンデ ニゲマシタ。 マタ ハジメ
 マシタ。 コンド ハ ワタクシ ガ ヲリマシタ ラ ニヤン ト
 ナキマシタ。 ソト ニ デテミマシタ ラ ネコ ガ ニヤン
 ト ケンクワ ヲ シテ キマシタ。 ネコ ヲ オヒマシタ。 ポン
 ポン トン デ ニゲマシタ。 ムコ デ ニヤン ト ナイテ ニ
 ゲマシタ。 ドコ カ ネコ ガ カクレマシタ カラ イシ ヲ
 クラワセマシタ。 ソシタラ ネコ ガ ヤボ ノ 中ニ ニヤン
 ト ナイテ ニゲマシタ。 ウチ ノ ネコ ハ ワタクシ ノ
 ニキ ニ キテ ニヤン ト ナキマシタ。 トナリ ノ ネコ ガ
 ヤボズラ ニ ヘイツテ イキマシタ カラ ワタクシ ハ ウ
 チヘ ヘリマシタ。

（『ひかり』第五号による）

猫のケンカは騒がしい。その騒がしさがよく出ている。家の猫に加勢をして、隣の猫に石を投げる。家の猫も心得ていて、「ワタクシ」の側へ来てニヤンと甘える。

「ウチ ノ ネコ ハ ワタクシ ノ ニキ ニ キテ ニヤン ト ナキマシタ。」

この一行が効いている。木村寿も「評」の中で、「キミノネコガ キミノソバニキテ ニヤントナイタコトヲ ワスレズニカイタコトハ タイヘンイイ。」とほめている。

昭和八年七月号には、詩「ナミ」、綴方「ボクノウチ」が掲載されている。この号も見ることが出来ず、『教育・国語教育』（昭和八年七月号）の広告によるものである。

※昭和八年七月号

ナミ

宮崎・土々呂校
尋一 戸松愛明

ハマニ

小サナ ナミ ト 大キナ ナミ ガ

ハナレ テ クルヨ

アライ ナミ カラ

白イナミ ニ ナツテ

ザブ ザブ クルヨ。

大キナ ナミ ノ オトハ

大キナ オト ガ スルヨ。

小サナ ナミ ノ オト ハ

スナバタ ヲ ハラボ テ

ザブ ザブ クルヨ。

『ひかり』第八号による

木村寿は『ひかり』の「評」で、「コレハ ケツサクデス。ナミノスガタヲ シツカリ ミテキマス。アライナミ 白イナミ ノトコニ フユノ カンジガシマス。ハラボテ ト イフコトバモ イキテキマス。」とほめている。木村の言う通り、波の姿をしつかり捉えた傑作である。

*散文篇

ボクノウチ

宮崎・吉呂校 尋一 吉井己義

「調べる綴方」である。染物屋である自分の家の様子を、調べて書いている。この作品については既に触れたので、ここでは省略する。

昭和八年八月号には、「キカイセン」という詩が掲載されている。八月号も実際の『綴り方倶楽部』を見ることは出来なかった。詩集『土々呂の詩3』に「一、二年生の時の詩」があり、全国誌に掲載された詩が載っている。そこからの転載である。したがって、同号に綴り方が掲載されていたかどうかは不明である。

※昭和八年八月号

キカイセン

川名信一

キカイセンガ

オキヲトホツテキル

二ソウナランデ トホツテイクヨ
トントントン
ケムリガノコツテ
アツチコツチ シテキルヨ。

百田宗治は「評」の中で、「トウオモシロイノハ、オシマヒノ、ケムリガノコツテ、アツチコツチシテキルヨ。トミタママヲカイタトコロデス。ソナフウニミエマスネ。」と言っている。見たままを書く時、どこを見るかが問題なのである。「トントントン」の擬音語もキカイセンをおもちやのように可愛らしく思わせる。

昭和八年の臨時増刊号（九月）には、木村寿の「調べる綴方の文話」が掲載されている。調べる綴方とはどういうものか、子どもたちに分かりやすく説明したものである。

木村寿は「調べる綴方」を、「君たちは自宅で予習します。それはあすの勉強が確実に理解出来る為でせう。綴方にもその予習があるのです。調べる綴方にはその予習が最も大切な役割を持つてゐます。ある事象を書く前に、その事象について調べて置くのです。」と、例を挙げて説明している。

昭和八年十月号には、綴方「雲」が載っている。

※昭和八年十月号

雲

宮崎県東臼杵郡土々呂小学校

尋二 戸松愛明

今まで空が青かったところに、西の山の方白い雲が出ます。見てゐるうちにだんだんおほくなつて、むかふの方はくらくらくなります。たがいがひるからさきです。いつときしてゐると、みんなくらくらくなつてきます。そして雨がふります。村の人がおうそうどです。そして、だりでも、「かしをせよ」といふ。子供は、それでも「よだきい」といつて、はじめはしません。そして大雨がふり出すと、それでも、しまいよる時かしをする子供がたくさんゐます。それでも、「もうやむよ」といつて、えんから、いごかずに、お母さんからおごられたり、お父さんからおごられたりします。雨がせつべふると、まつ黒い雲がだんだんうごいて、白い雲になります。まだ見てゐると、白い雲の中から、青い雲が出て来ます。

青い雲が一ばんきもちがいいのです。青い雲になると、みんなよろこびます。水あべやいきます。青い雲の中に白い雲があります。白い雲は、うつくしです。海にうつちよるとは、うつくして、てな

ん。雲には、赤い雲があります。それはたいがい夕方です。あの雲が出ると、あかるくなつてきます。山もあかるい。えごの池の水もあかるい。人のかほもあかるい。いつとき見てをると、あの赤い雲がへつていきますと、あたりがずつと、くらくらなつてきます。

雲のかたちは、おも白いのがあります。いわのやうなかたちをしたのが出てゐる時があります。いわがくづるごつあります。そのほかに入道雲があります。入道雲は山のおつくから、むくむく出てきます。そしてせつべでできて、夕だちをつれてきて、雨をばしやばしやふらせます。ぼくは一ぺん はだかになつて、さるたことがありません。それは、まもちやんとたかしだけしました。

それからいとのやうな雲があります。それはたいがい白雲です。すつとなつてうつくしです。そしてそんな時は天気がいいです。

そのほか雲のかたちはおも白いやつがたくさんあります。犬のこや、人のとこなどが出る時もあります。みんな青い雲をよるこびます。雨がふつたあとや、青雲の時は、お父さんやお母さんが、「いやんべちや」とよるこびます。そつでん青い雲ばつかり出ると、だれたやうになります。あさはよいけんどん、ひるごろはだれてしまひます。

『ひかり』第十三号から採った綴方である。最後の段落が文集では三つに分かれているなど、若干の違いはあるが、ほぼ同じである。木村寿は「文話」の中で、「戸松君のは、君たちがいつも見てある空の雲について書いたのです。」と、普段見ている物を綴方の対象にしたことに注意を促している。更に「この文をかく前に、いろいろしらべてある」のが良いと言っている。普段何気なく見ている物を、意識して観察し、調査して書く、「調べる綴方」である。

昭和九年にはいると、毎月のように詩が掲載されている。

一月号は『教育・国語教育』昭和九年一月号に広告が載っている。それによると、「本誌にすゐせんされた綴り方」に「僕たちのスケツチ」が、「本誌にすゐせんされた童詩」に「松の木」（梶井清）が掲載されている。「僕たちのスケツチ」の作者は「宮崎・土々呂校 尋二 男」とあるだけで、名前はなない。

以下、一〜三月号に載った作品は、『土々呂の詩3』からの引用である。

※昭和九年一月号

松の木

梶井 清

松の木が

みぞごにうつる

松の木のおとがする

お日さまが

松の木のあひだにうつる。

溝に映った松の木の間に、太陽光があたり、水面がまぶしく輝いているのである。百田宗治は「自由画のやうに、色のかんじがよくでてゐます。けしきが、ほんたうに、子供らしく、いきいきと、かゝれてゐます。」と評している。

※昭和九年二月号

とんび

花岡福美

とんびがまひながら

くるつとかやつた

日の光がとんびにかかった。

とんびがまばいかった。

港町だけあって、とんびも子どもたちの作品によく出て来る。見慣れた情景なのだろうが、反転して太陽にかかったところを捉えたのが評価されたのである。百田宗治は「よく見ることです。しかしこの詩はよくかけてゐます。『くるつとかやつた』がたいへんよるしい。」と褒めている。

※昭和九年三月号

くも

川名信一

くもがにんげんのかたちをとつてゐる。お日さまがくものあひだにてりこんである。

菅 邦男

百田宗治は「おもしろいところをみつけました。」と、雲が色々な形を見せるところに着目したことを褒めている。「てりこんである」を、「なかなかうまいことばです」とも言っている。立体的な雲と雲との間に光が差し込んでいるところを、このように表現したのである。

つばきのは

高瀬 学

つばきのはが風にあかれてつばきのはは道のまん中にかげをうつらかしてゐる。

詩としてはどうということもないものであるが、百田宗治は「道のまん中にかげをうつしてゐるつばきのはに、よく気がつきましたね。詩もおちついてうまくかけてゐます。」と言っている。物をよ

く見ていることを褒めているのである。

なお、『教育・国語教育』昭和九年三月号の広告によると、「綴り方」の部に、吉井己義の「冬の風」が入っている。

昭和九年四月号には、高橋敏郎の「とんびと子供」、黒木重行の「ぶた」という童話が載っている。

※昭和九年四月号

みなさんの作った童話

とんびと子供

高橋 敏郎（尋二）

宮崎県東臼杵郡土々呂小学校
いわしがたくさんとれて、いわしがはまにほしてありました。とんびが北の方からとんできました。さかながびかんぴかん光つてゐたからほしいと思ひました。とんびはさかなの上に来て、びいひよろ、びいひよろ、ときました。

子供がとんびを見ました。とんびはひもじくてあまりせんから、又、びいひよろ、と鳴きました。そしてわを聞いて見せました。子供が「とんびが字をかきよるが」といつてよろこびました。とんびは、子供があつちにくといじやがと思ひました。とんびはわを聞いて鳴きながら、びいひよろ、びいひよろ、と、首をうごかして、鳴きました。とんびは、なんぼでもわを聞いて鳴きました。子供はとんびが、ひもじいのだらうと思ひました。それでも子供は、さかなのばんをせんならんとちやから、あつちに行くことはできません。とんびがひもじいだらうと思つて、ねむつたふりをしました。そしてたらとんびはおりてきて、一番いわしのわるいのをいびき取つて上

りました。子供が上を見たら、とんびは、うれしさうに、ぴいひよろ、と鳴いて、北の方へまっつていきました。

（木村寿先生指導）

「さかながびかんぴかん光つてゐた」という表現が良い。「ぴかんぴかん」は土々呂で日常的に使われている表現である。「びかびか」ではなく、「ぴかんぴかん」と地元の言葉を使うことで、情景に相応しいのどかな雰囲気を作り出している。

鯛をねらうとんびと、見張り番の子供。この対立する構図が、子どもは寝たふりをし、とんびはそれに応えて鯛の一番悪いのを取っていくことで、平和的に解決されている。自然との共存である。

木村寿は同号に「隆の童話」（「童話の作り方」）を、子供向けに執筆している。その中で、「二羽の雀が電線にとまつて鳴いて居る。これを下の方から、じつと観察してゐるだけでなく、童話を書く心は、雀と一しよに電線にとまる心になるのだよ。それでないと雀の心になる事は出来ない。」と、言っている。「とんびと子ども」が、両方の気持ちを汲んで書かれているのも、木村寿のこうした指導によるものである。

「隆の童話」（木村寿）は、「童話の作り方」について書いたものである。例として木村隆（土々呂小 尋二）の「おや牛と子牛」が使われている。

また、角虎夫の「童話はいかに書く―題材の見つけ方―」も掲載されているが、その中に花岡友美の「がらす」が例文として引用されている。

これらについては、また機会を改めて、「木村寿と童話」として述べることにする。

詩は、二篇掲載されている。百田宗治の選である。

※「百田先生選・評」

すずめ

金井満男（尋二）

宮崎県東臼杵郡土々呂小学校

竹やばに風が吹いて
すずめが

竹やばから

吹き出されてきた。

（木村寿先生指導）

（百田評）

「竹やばに風が吹いたので、おどろいて、パツと出て来たすずめ。〈竹やばから吹き出されて来た〉やうに見えたかもしれません。これも〈竹やばから 吹き出されて来た〉とかいたのがいゝのです。詩はみじかく書くほどいゝのですから、これだけでたくさんなのです。〈竹やば〉は竹やぶのことです。」

これも「見えたように」書いたところが評価されているのである。

お父さん

中野辰夫（尋二）

宮崎県東臼杵郡土々呂小学校

僕のお父さん

このさむいのに

えきでにもつをかかへてゐる。

僕はたんぶのわきに立つて

お父さんがにもつをかかへて

あつちに行くのを見てゐた。

（木村 寿先生指導）

百田宗治は「土々呂校の二年生は、みな詩が上手です。それに、みんな、めいめい、ちがったことを、ちがったふうに、かいてあるのもよろしい。」と、土々呂小学校の詩がパターン化していないことを評価している。それぞれが、それぞれの見方をしていているということである。

この詩は、父親の働く姿をとらえたものだが、入江道夫は父親の労働への視点を、「我々は今後に於て、此の新しい観点を積極的に取上げることによつて、児童の詩をもつと解放してやらなければならぬ」と評価している。

昭和九年五月号では、齋藤守の詩「海」が推薦になっている。

※昭和九年五月号

すめせん 尋二 海 齋藤守 土々呂小

海(すめせん)

齋藤 守

海の中にはがある

海のまん中にすはつてゐる

そのいはの下から

白いなみが

ぼたんとはひ上つてゐる。

(木村寿先生指導)

海のまん中に坐っている岩という捉え方に面白さがある。その岩を這い上がってきた波が、限界まで来たところで「ぼたん」と落ちる様を描いたのである。百田宗治もその点をほめ、「海の中にある岩に、白いなみのうちよせるところが、いかにも子供の見たままに、

絵のやうに書かれてゐます。」と言っている。

(入選)

春のほひ

戸松愛明(尋二)

宮崎県東臼杵郡土々呂小学校

てつちやんかたから

かへりよつたら(かへつてゐたら)

なの花がさいて居た

とまつて見て居たら

てふてふのほひがする

もうてふてふが

出たんだなあ

(木村 寿先生指導)

子どもにとつて、菜の花と蝶々は、セットになった春の景色なのである。「てふてふのほひ」は大人が使うと技巧的で嫌みな表現だが、子どもには素直にそう感じられるのだろう。百田宗治は「へてふてふのほひ」といふのが、いかにも子供らしい、おもしろい感じかたです。」と言っている。

他に「佳作」と思われる詩に「ぶた」がある。

ぶた

小泉 光明(尋二)

ぶたが

日なたぼっこをしてゐる

ぶた小屋は

日がつてもやもやしてゐる

ぶたが大きいいきをしてゐる

〈木村寿先生指導〉

「ぶたが大きいいきをしてゐる」で、寝転がっている大きな豚の様子がリアルにイメージされる。

綴方では、吉永民雄の「五月の花」、岡崎忠雄の遠足の綴方「おもしろかつたこと」（尋二）が入選している。

「五月の花」は、家の藤の花、みかんの花、学校のせんだんの花の様子を描いたものである。「おもしろかつたこと」は、遠足に行つて、松かさで戦争ごっこをしたことを書いています。

※昭和九年六月号

風

風が吹いてゐる

生とがならんで

学校にいきよる

着物の下を

つぎつぎ吹き上げてゐる。

松永行雄

山

山の木に

風がつきあたってゐる

木が

山の上にたほれかかるよ

風がこんどはおこしていく

松永行雄

木が

山の上にしやんとたつよ

これも『土々呂の詩3』からの引用である。

当時の生徒である須田進さんや梶井ツタエさんによると、学校には、男の子は制服（学生服）、女の子は着物で通つた。当時の、学校で撮つた集合写真でも、そうした服装をしている。ただ寒い頃は男の子も服の上に着物を着て行ったそうである。着物と言つても、「はんでん」のようなものであろう。

詩としては「山」の方が面白い。強風の様子が木の表現でよく分かる。倒れたかかった木が吹き起こされて、「山の上にしやんとたつ」のが面白い。

※昭和九年七月号

綴方には花岡友美の「自どう車」（尋三）、短い文に花岡友美の「さくらの葉」があるが、いずれも未見である。文集第十七号あたりに載つたものだと思う（第十七号は未発見）。

詩は「一年生」「雀さし」の二篇である。『土々呂の詩3』の作品である。

一年生

一年生がよるこんである

先生のうしろについて

みんなついて行く

花をもつてゐる子もおる。

黒木 智

新しく入ってきた一年生。三年生から見ると、小さく可愛らしく見えるのだろう。

推薦

雀さし

吉井己義

さくらの枝に

雀が向ふ見て とまつてゐる

あきちやんが

はの間からやんもちでさしてゐる

雀は きよろきよろしてゐる

あきちやんの手がうごいてゐる

させるかな

やんもちが光りながら雀にちかよつていく。

吉井己義はなかなか達人である。雀が捕れたかどうかの結果ではなく、やんもち（とりもち）が雀に迫つていくところで止めている。「やんもちの木」の皮をはぎ、石で叩いて細かくし、水ですすいでかすを取る。これを繰り返して純度を高め、やんもちを作る。高学年になると「おとり」を使って目白などを捕るのだが、低中学年の子は身近な雀を捕つたのだろうか。

うみの中

尋三 戸松義男

宮崎県東臼杵郡土々呂小学校

〈木村寿先生指導〉

てんまからとびこんだ

いきをすいこんだ

うみの中をおよいだ

うき上るごつするけど

もう一つうんとおよいだ

百田宗治は「推薦詩評」で、

「気持よくかけました。『うみの中をおよいだ』はあたりまへのことのやうですが、よく気を付けて読むと、『うみの中を』およいだといふのですから、いかにも涼しさう、冷たさうで、よく気もちの出てる句です。『うき上るごつするけど』は浮き上るやうになるけれどです。浮き上るやうになるけれども、もう一度うんとおよいだといふ意味です。」

と述べている。佳作は、中野辰夫の「雨」である。

佳作

雨

中野 辰夫 〈尋三〉

宮崎県東臼杵郡土々呂小学校

昭和九年十月号では「うみの中」が推薦になつている。木村寿の「武君の詩」は、高田武の「舟のほぼしら」という詩を学級で批評推敲する様子が描かれている。この文章の上段にはたくさんの土々呂小学校の子どもの詩が掲載されている。

※昭和九年十月号

お母さん
畑から

着物をじくりぬらかしてきた。

僕はこやの上で

ほたるかごとくつくつてゐたが

お母さんがしぼるのをじつと見てゐた。

お母さんは

頭の毛をふるてしぼつてゐる。

これは『光』第十九号の詩である。綴方は幾つかの部に分けられているが、その「雨と生活」の部の扉に書かれている。「畑」は文集では「畠」である。

畑仕事をしていた、俄に雨が降ってきたのである。ずぶ濡れになったお母さんは、髪の毛の雨水を、ふるって落としているというのだらう。女性の髪が長かった時代である。

中野辰夫の「お父さん」と同じく、親の労働を視野に入れた詩である。詩としては推薦になった「うみの中」よりも優れている。

百田宗治は「螢籠を作りながら、畠から濡れて帰ってきたお母さんの方を眺めてゐるといふのがいかにもほんたうの生活が出てゐてよいと思ひました。」と述べている。

※「武君の詩」（木村寿・文）の上段に掲載された詩

海の詩

●はとば

はとばに来た波

もどつていく道

白い波 青い波

はつとにぎやかになる。

宮崎県土々呂小学校

花岡 友美

●みなと

みなとにうつるもの

たいなのみどり色の山

山のねの白い兵しや

かばいるの夕方の雲

かげをうごかしてゐる風。

吉井己義

●夜のみなと

おきの方に

舟のらんぷ

ぼつんぼつんついてゐる

みなとの舟

ぴちやりぴちやり

音をさせて居る

中野辰夫

●みなと

みなとは舟いっぱいで

そん舟になみがいつぱいちらかつてゐる

齋藤 守

●夜のみなと

夜のみなと

舟が黒いかたまりで

らんぷをあかしてゆれてゐる

らんぷの下

人のすがたがぼんやりしてゐる

海にうつつた

はとばの電気が

齋藤 一

赤いはしらになつて
舟までとどいてゐる。

●はとば

ひるのはとば
だれもをらない
おりがひとり
なみをみてゐる。
なみが風におはれて
おりのそばにくる。

齋藤 守

●舟

みなとの小さい舟
なみにゆられてゐる
あつちがあがれば
こつちが下る

高田 武

●白い船

よその船
白ぬりの船
海にうつつてゐる
白ぬりの船
はつきりするな
みんな見てゐる

戸松 愛明

いずれも、よく観察されている。短い詩だが、的確に情景を捉えて表現している。『土々呂の詩3』掲載の詩である。

なお、「綴方生活」昭和九年十一月号「綴方月評」に『綴り方倶楽部』十月号の評があり、平岩小学校訓導養部哲三は、「実践的作品を示してそのたのもしさを示してゐる人」としてその名が挙がっている。「宮崎美々地校。割によく見て書いてゐる。」と評されている。評者は三木堅太郎である。

詩の欄は全体に評判が悪い。「明倫、神出、土々呂、美々地、豊西校等のつまらん作が推薦でちと顔まけの型か。」「木村寿の詩話は歯が浮く。」と酷評されている。入選詩については「一般入選の所では新潟長嶺のうみ、土々呂の雨、宮城広瀬のすがり等いい方」と、土々呂の詩では、「うみの中」よりも「雨」の方が評価されている。

※昭和十年六月号

この号では、吉田瑞穂選・課題詩「草」「卒業」に「さくらの芽」が佳作に入っている。詩の内容からすると、「さくらの芽」の誤植だと思われる。

佳作

さくらの芽

宮崎県東臼杵郡土々呂小学校

戸松愛明(尋三)

〈木村寿先生指導〉

学校のさくらの
芽が出たよ赤い芽
この芽には花もさいてゐる
白い花よ
福美君にいつたら
めづらしさうに見た目が光つた

※昭和十一年二月号

稲村謙一の題材表「2月の詩はここから見つかる」に、例文として、土々呂の詩が引用されている。

低学年 足

足かた

ちびたい水で

足をあらった

らうかあるいた

足かたが

ぽつんぽつんついたよ

おりの足

まん中がないなあ

●自分の足をみてみて思ったこと

●自分の足に話しかける

●自分の足の詩を作らう

足のまん中が無いとは、土踏まずのことだろう。土々呂の詩は実に色々の物・事象に目を向けさせている。稲村謙一がこの詩を題材例としたのは、自分の周囲のどこにでも詩はあることに気づかせたかったのである。

昭和十一年六月号の最後のページには、木村寿が課題文の選を受け持っていたことを示す記事が見られる。

※昭和十一年六月号

○課題文募集

佐々井秀緒先生選（八月号）「財布」

木村寿先生選（十月号）夏休み中の「手紙」「日記」

昭和十二年六月号にも、「北原白秋先生選 童謡・童詩・本郷兵一先生選手紙、木村寿先生選 日記」とあるから、交代で選者を務めていたのである。

この外、昭和十三年四月号には木村寿の「読者の皆さんへ」と「風車の学校」が掲載されている。

「読者の皆さんへ」は、一ページほどの短い文章である。早起きした子どもが早朝の天気の中で、「僕はこの発刺とした精気の中に生きてゐるんだ。」と叫ぶと、「父母の子として、先生の教へ子として、村の子供として、世界にたくひなき日本の本に生れた日本人として、正しく強く、さうだ強く正しく生きて行かねばならないんだ。」という考えが、「血汐となつて血管の中をぐるぐる廻りだした。」という、「時代」を思わせる話である。

「風車の学校」は、教訓めいた童話である。

ある日、先生から風車の作り方を習った清は、風車を手に登校する。早足で急げば急ぐほど風車は勢いよく回るので、それに引かれて多くの子が学校へ急いだ。翌日は二十本ほどの風車が帽子かけに並んでいた。みんな風車を回すために急ぐので、遅刻者がいなくなった。清の目的は遅刻者をなくすことだったのである。やがて他学年の子も風車を持つてくるようになり、学校は「風車の学校」と呼ばれるようになる。

「真剣に考へられた力は、それが、一つでものちには人々を動かす様になる、清の考へた一つの風車が、この学校から、遅刻をなくしてしまつた。まじめに考へられた力は、えらいものだ。」

という教訓である。

昭和十三年六月号では「事変の綴方特集」、八月号では「慰問文と事変の綴方・第二部」を特集したりしているが、宮崎県関係者の文章は無い。

(二) 昭和十年版『日本児童詩集』

『日本児童詩集』は、『綴り方倶楽部』に寄せられた詩集・文集を対象に、全日本綴方倶楽部が編集したものである。昭和十年版及び十一年版の『日本児童詩集』には、宮崎県の小学校から九校の子どもの詩が掲載されている。土々呂小学校もその中の一校である。昭和十年版に、詩七篇が掲載されている。

※よいてんき 尋二・作品集 四月

雲

齊藤 守

宮崎県東臼杵郡土々呂小学校

木村 寿指導（雲日記）

目をつぶつて

ぢつとかんがへてみると

今 見た 雲が

おりてくるやうだ

『雲日記』は詩集なのか文集なのか、不明である。詩集としては『土々呂の詩2』があるから、臨時号として出した文集なのではないかと思われる。

海

齊藤 守

宮崎県東臼杵郡土々呂小学校

木村 寿指導（ひかり）

海の中にいはがある

海のまん中にすはつてゐる

そのいわの下から

白いなみが

ぼたんとはひ上つてゐる

『綴り方倶楽部』昭和九年五月号に「すゐせん」で掲載された作品である。（既出）

※たいはうの花火 尋三・作品集 五月

雨

中村辰夫

宮崎県東臼杵郡土々呂小学校

木村 寿指導（ひかり）

お母さん

畑から

着物をじくりぬらかしてきた。

僕はこやの上で

ほたるかごをつくつてみたが

お母さんがしぼるのをじつと見てみた。

お母さんは

頭の毛をふるはしてしぼつてゐる。

同じく『綴り方倶楽部』昭和九年五月号に載った作品である。同

誌では佳作だったが、『日本児童詩集』を編む際に、再評価されたのだろう。(既出)

六月

むぎかり

須田 進

宮崎県東臼杵郡土々呂小学校

木村 寿指導(ひかり)

まるぼ山のむぎかり

ざくざくかつかつてゐる

かつかつてはこしをのばしてゐる

下の方で

むぎをあやす音がする。

註 あやすは落す

『土々呂の詩3』に掲載されている。「まるぼ山」は、詩集では「まるぼ山」となっている。作者の須田進さんによると、「まるぼ山」が正しい名前だそうである。自宅の裏山で、段々畑になっていた。そこに須田さんの家の畑もあり、麦を植えていた。両親が仕事をしている間、弟や妹の面倒を見ていたとのことである。そうした時のことを書いた詩である。「まるぼ山」は、今は団地になり、その名を知る人もいない。

うまの子

尾崎三浦志(尾崎三津志)

宮崎県東臼杵郡土々呂小学校

木村 寿指導(ひかり)

うちのうまの子

ぼんぼんとんであるく

うまの子

お日さまをみて

びつくりして

うまごやにとびこんだ

『土々呂の詩3』では、作者名は「三津志」になっている。二行目は「ぼんぼんとんでさろく」である。「さろく」は方言なので、編集者が「あるく」に直したのだろうか。広辞苑でも「九州地方で歩く」とあるが、「あちこちする」のニュアンスを含む。

木村寿は「ぼんぼんとんでさろくといふのが、ぴよんぴよんとんでさろく」と書いたらだめです。ぼんぼん、といふので、いかにもうまの馬がまだ小さい、何にでもおどろくやうすがわかります。」と書いている。「馬の詩を書く時には、自分の見た馬の詩を書くやうにならねばなりません。」ということである。『光』には珍しく、童謡を思わせる作品である。

十二月

こじの木

高田 武

宮崎県東臼杵郡土々呂小学校

木村 寿指導(ひかり)

こじの木が

おきよ

ぼくがえとりまわさんよ

二人ならえとりまわすがね

この木

なかなかおけなね

「こじの木」は、椎の木である。「おきよ」は「大きいよ」、「えとりまわさん」は「ようとりまわさん」、つまり「椎の木が大きくて、僕の両腕ではまわらない、二人ならまわる」の意味である。「おけなね」は「大きいね」。むろん、熟れると食べられる「こじの実」のなる木だからこそ、その大きさに感嘆しているのである。

※海の中の岩 尋五・作品集

五月

きりの山

川名信一

宮崎県東臼杵郡土々呂小学校

木村 寿指導〈光〉

僕たちののぼるあたご山

きりがはつてゐる

するつと流れてゐる

きえて又あつまつてくる

高い山

あのきりの中にのぼるのだよ。

尋常五年生の作品集に収められているが、『光』とあるように、三年生の作品である。五年生の作品と比べてみても、全く見劣りがない。『光』が土々呂小学校三年生の文集であることを知らなければ、五年生の作品集に入っている、誰も違和感を感じないのではないか。

この詩は、文集『光』第十八号の中表紙に掲載されている。第十八号は綴方と日記のみで、詩の部はない。したがって木村寿は、特にこの詩を選んで中表紙を飾る詩としたのである。「あとのことば」

に「これには、詩は一つものりませんでした、六月の中ごろに、土々呂の詩3として出します。」と書かれている。第十八号の詩の部が、詩集『土々呂の詩3』なのである。

『土々呂の詩3』にはこの詩も収録されているが、そこでは「えんそく」という題になっている。第一行の「のぼる」は「いく」、最終行の「きりの中に」は「きりの中を」である。

えんそく

川名信一

僕たちのいくあたご山

きりがはつてゐる

するつとながれてゐる

きえて、又あつまつてくる

高い山

あのきりの中をのぼるのだよ。

(『土々呂の詩3』)

愛宕山は延岡市の南部にある標高二五三メートルの山である。子どもたちは、土々呂から二里の道のりを歩いて行ったのである。行く手に愛宕山が見えてきた時、霧がかかっていたのだろう。「あのきりの中をのぼるんだな」と思ったのである。「僕たちのいくあたご山」には、そうした距離感がある。

それに比べて「僕たちののぼるあたご山」は、山の近くまで来て、自分たちがのぼる愛宕山を見上げている感じである。したがって、今から「あのきりの中に」登るのだよ、ということになる。題も、目の前にそびえる「きりの山」となる。

子どもの感覚としては、「えんそく」の方が素直である。第十八号の「きりの山」という題は大人の感覚である。「えんそく」が原

型だったと思われる。「きりの山」も文集に載せているのだから、木村寿が勝手に書き直したわけではないのだろう。須田進さんも、先生が書き直したり訂正したりすることはなかったと言っている。経緯は分からないが、中表紙を飾る詩として「きりの山」の形に直し、詩集の方には元々の詩を載せたのであろう。『綴り方倶楽部』『日本児童詩集』には、第十八号の詩が採られたのである。

なお、『土々呂の詩3』には、「遠足の詩」というコーナーがあるが、この詩はそれとは別に「川名信一の詩（八へん）」の中に掲載されている。『綴り方倶楽部』昭和十一年二月号で、稲村謙一の題材表に例文として引用された詩「足かた」も、この中に入っている。

木村寿は川名信一を「体は小さい。やせてゐる。強い風でも吹くと、どこかに持つていかれそうなり。それでもけつして休まない子。雨の日も、天気の良い日も、はだして元気でくる子。生れたての馬が、何にでもびつくりするやうに、いつもびつくりしてゐる子。」と言っている。感性の豊かな子どもだったのである。

（三） 百田宗治と土々呂の詩

（評者と指導者の見解）

『綴り方倶楽部』の選者だった百田宗治は、昭和九年三月に『批評と添削 小学児童の詩』（厚生閣書店）を出している。この中の、尋常一年生、二年生の部に土々呂小学校の子どもの詩が収録されている。木村寿は「詩の指導に就いて」（『綴方実践の開拓』）の中でこの書に触れ、「指導者としては、附加すべき意味でいひたいことがある」と、百田の解説を引いて論じている。この木村の言葉を交えながら、見ていくことにする。

なお、本の中では所属校と氏名は詩の後に書かれているが、便宜

上氏名は前に書き、所属校は省略する。

※『批評と添削 小学児童の詩』

「尋常一年生の詩」

カキ

カキガ アカイデス、

チツト ナツテキマス、

ワタクシガ ミマシタ、

ヒカツテ キマス。

川名信一

（百田宗治評）

これはまた何といふ単純な表はし方であらう。しかしながら、この位が尋一の児童のもつとも正直な、そして純粋な「詩」ではなからうか。

最初に柿が赤いと書き、それから正直に少し熟つてゐると言ひ、それを自分が見たといふことを自証して、最後にその光に言及する。（この「光」といふのは或は指導者が特に注意をさういふ方へ向けさせたためではないか。疑ひを存す）この中で面白いのは「ワタクシガ ミマシタ」の句である。これは極めて正直な、詩としては無能の表現であるかもしれぬが、この一行によつてこの作に思ひがけぬナイーヴィテが添つてゐることに気づいた。

「ワタクシガ ミマシタ」といふのは何の不思議もない、当然に省略されていゝ一行であるが、しかし八歳の児童にはそれを書く権利があるのである。千家元麿といふ詩人に『僕は見た』といふ題名の詩集があることを附記して置かう。

百田宗治は「チツト ナツテキマス」を「熟る」だとしているが、これは「生る」である。「柿の実が少し生っている」の意味である。宮崎の子どもは「熟す」「熟れる」とは言っても、「熟る」と表現することはない。

『ひかり』第七号には「ミカン」という詩がある。

ミカン

黒木誠夫

山 ニ ミカン ガ アカイミカン ガ

タクサン ナツテ キマス。

ミカン ガ ウレテ キマス。

ワタクシ ガ マドカラ ミテキマス。

ミカン ガ マツカニ ナツテ キル。

この「ナツテ」も「生る」であり、「ウレテ」が「熟れる」である。木村寿は、「ナツテ」については、何も言っていない。

「ワタクシガ ミマシタ、」については、「一年の子供には、綴方にしても詩にしても、かう自証せなければ、表現の満足を感じるこ

とが出来ないのである。」と述べている。
これを裏付けるように、『ヒカリ』には、「ワタクシガミマシタ」という表現が他にも幾つか見られる。

サイト^{ママ} ハジメ

ウチ ノ ニハトリ ワ コケコロ ト ナキマシタ。ワタクシ
ガ エヲ ナゲ テ ヤル ト ココロ ト ナイ テ タベマ
ス。ミンナ デ シヤゴンド タベマス。ワタクシ ガ ヒトリ

デ ミテキマシタ。

(『ヒカリ』第一号)

百田宗治が言うように、「ワタクシ ガ ヒトリ デ ミテキマシタ。」は、「鶏を表現する」という意味では無くても良い一行だが、あれば熱心に鶏を見ている子どもがイメージされて、情景が豊かになる。或る意味での自己主張なかも知れない。詩「ミカン」にも「ワタクシ ガ マドカラ ミテキマス。」という一行がある。

「ヒカツテキマス。」について木村寿は、「子供の自然発生的な観察の表現には、観察の第一歩に帰るといふ傾向がある。ヒカツテキマスと最初のカキガアカイデスの表現の不足を補っていくやうである。」「子供の表現には、観察の不足、感情の至らなかつたものを、あとから追附していく傾向がある。」と、百田宗治の「疑ひ」を否定している。

カキ

黒木重行

カキ ガ マツカ ニ ウレテキル

山ノ木デ ピヨロ

トビ ガ ナク

スズメ モ ナイテ キル

カラス モ カカト

ナイテ キマス。

ソラ ハ ハレテ キマス。

(『ひかり』第五号)

木村寿はこの詩を引用して、「山の中に一きは目立って柿が熟し

てゐる。その山の上の空は青々としてゐる。その観察はしてゐながら、表現し得なかつた風景を、あとから附けずにはゐられなかつたのだ。」と言っている。詩としての構成力の不足から来るものなのだろう。

フネ

宮野杉義

フネガ トントン
ナラント キマス、
テンマンコヲ
コジデ キマス。

百田宗治は「〔コジデ〕は漕いでであらう。」「たゞ船がならんで来たといふだけではつまらぬが、伝馬を漕いで来たといふ『観察』の結果を書いてゐるので、それが具象的に一つのイマジユを他人に与へる。」と解説している。

しかし、木村寿によれば、『ゴジテ』は『ヒヨジツテ』（「引いて来る」）で、子どもたちの会話では、それを『ゴジテ』と言うのだそうである。発動機船がトントン音を立てながら「並んで港にはいつてくる。どれもが、伝馬船を引いてゐる」のである。「漕いで」と受け取った百田宗治は「トントン」をどう受け取って良いか分からなかつたらしく、『トントン』といふのは発動機の音であらうが、発動機船と伝馬がならんで来たのか、発動機船がならんで来てその他に伝馬船が漕いで来たのか、その辺を明瞭にしておかせる必要があらう。」と言っている。

なお、『ヒヨジツテ』を木村寿は「引いて来る」としているが、『ひよする（ひよする）は「引きずる」の意味である。

アメ

花岡 友美

アメガ フリマシタ。
アメガ フルト クライカツタ、
クライ テン、
ソトニ デラレンカツタ。
アメガ ヤミマシタ、
イエナカガ アケ ナツタ、
ワタクシタチガ ソトニ デルト
ミンナモ ソトニ デテ
ヨロコビマシタ。

百田宗治は「方言で書かれてゐる興味で選び出した。方言のなかに児童の生活がさながらに躍つてゐる。」と評している。方言での表現は「フネ」のように誤解を招く面もあるが、生活語であるから「特に、詩に生活をあらはす詩に於ては、方言を使つた方が子供にはぴつたりして来る」（木村寿）のである。

「尋常二年生の詩」

つばき

齋藤 一

くどうのつばきはまんまるい、
だんだんになつてうつくしい、
はは あをでまるいね。
つばきの下で
にはとり こけこけ

にはとりうれしいやうにしてゐる。

「くどう」は、人名である。小学校の近くに工藤さんの家があったようである。百田宗治は「くどう」は地名か」と言っているが、地名では鶏が遊んでいる説明がつかない。

工藤さんの家の椿は段々になつていて美しいというのである。数本の木が段々になつているのだらう。その下で鶏が嬉しそうに餌をついばんでいる。昔の鶏は昼間は放し飼いで、夕方になると小屋へ入れたものである。百田宗治も「この詩の一番優れたところは最後の二行であらう。」と言っているが、「こけこけ」という鶏の鳴き声や、健康さが良い。

なお、この詩は「尋常二年生の詩」に収録されているが、『ひかり』第十号（昭和八年三月）に掲載されており、一年生の詩である。

かぢや

小泉 光明

かぢやがてつを

火にくべて、

まつかになつたやつを

たいた、

とつてんばつ とつてんばつ

ひがでる、

かねがまがる。

この詩も『ひかり』第十号からのもので、一年生の詩である。

百田宗治は「『とつてんばつ とつてんばつ』の音感に特色がある。萩原朔太郎といふ詩人は、鶏の啼声を『とをてるもう とをて

るもう』と書いた。かういふ音の感覚などはあまり不自然な作り出したやうなものはいけませんが、さうでないかぎりそれぞれの特異な音感を尊重し、また描き出したものである。」と、その擬音語の独自性を評価している。

なお、萩原朔太郎の詩「鶏」の鳴き声は、「とをるもう」である。

からす

谷 勇一

からすが

でんしんばしらでないてゐる、

とんべしでないている、

とんべしにお日さまがしづむよ、

かあかあとないてゐる、

やのせんせい が しんなつたよ。

「鴉と夕日と死」という取り合わせは昔からあるが、そんな陳腐さはみじんも感じさせないインパクトがある。最終行「やのせんせいが しんなつたよ。」が効いている。「とんべし」は「てっぺん」、「しんなつたよ」は「死になつたよ」である。

『ひかり』第十号に載つた詩である。「かなしみーやのせんせいのしー」として、四篇の詩がまとまつて掲載されている。いずれも二月の作品で、一年生の時の詩である。

百田宗治評は「これも特色ある詩である。」と言ひ、長文の評を載せている。

(略)それよりも興味が深いのは、最後の一行「やのせんせいが しんなつたよ」即ち矢野先生が死になつたよである。この一行を

終りにつけ加へたところ、もし指導者の何等の手が入つてゐないとすれば（児童の情感がそのまゝ発露されたものとすれば）、期せずしてまことに巧妙な詩術が働かされてゐると見なければならぬ。

飯にさういふ見地に立つて見るとすれば、いふまでもなく、はじめに鴉のことを書き出したところから、この作者は既に最後の一行を予定してゐたのであらうと思ふ。しかもおくびにもそれを出さないうで、電信柱の尖点でない鴉、沈む夕陽を写生的に写し出した後に、同じやうな客観的な手法で、矢野先生の死を付け加へたといふやうな観方をすることも出来る。それとも或は偶然にそれとこれとが結びついて、かういふ無縫の作品が生れたのかも知れぬ。何れにしてもその主観を露出させないで、この真摯な追悼詩を書き上げたところ妙味のある作品といふべきであらう。

「やのせんせい が しんなつたよ」は云ひ換へれば、主観を露出しないどころか、大々的な主観露出の表現であるかも知れぬ。外の言葉を知らないで、この一行を圧倒的に書き下したものであるかも知れぬ。それなればこの児童の真実に充ちた気持がこの作品を産み出したのである。「しんなつた」の素朴な地方的表現がそれに預かつて力あることも素よりである。

百田宗治の言う通り、表現としては客観的な事実の叙述でありながら、「やのせんせい が しんなつたよ」で、すべてを語り尽くしている。

木村寿によると、「矢野先生の入棺を見送つた直後の作」だという。「矢野先生は、子供の家のすぐ下に久しく住まつてゐただけに親しさは他の子供よりも深かつた」のである。

「葬儀日、古里に帰る矢野先生の棺を子供は母なる人と共に見送つてゐた。影が見えなくなる迄も見送つてゐた。門口に集つて矢野先

生の生前を語つて見送つてゐた。村の人々の淋しさを増すかのやうに鳥がないた。見上げると沈みかけた夕陽を浴びて、鳥が鳴いてゐる。人々は思はず、『矢野先生も死なつたね。』涙を浮かべながらつぶやいた。作者も、矢張りさうした悲しさと淋しさが、胸いっぱいになつて来るのを禁じ得なかつた。かうした生活の背景の中から、その詩は生れたのである。どちらかと言へば此の子の日常の詩は学級の中では勝れたものではない。感情の豊かな子であるが、ともすると人のまねをする子供であつた。然るに、この作品には、それらが、充滿した感情の為に解消されて、自然に妙味ある表現に及んでゐる。」

木村寿は当日の様子を述べながら、「指導者の手が入つた」ことを否定している。「期せずしてまことに巧妙な詩術が働かされた」（百田宗治）のである。

ひんこつ

高橋忠雄

ひんこつが木のえだにとまつて
しろんばちをいごかすよ、
こちこちとないてにげたよ、
まだそこにをるごとあるよ。

これも『ひかり』第十号、「新芽集」の作品である。

最終行「まだそこにをるごとあるよ。」が効いている。木の枝の「ひんこつ」が盛んに尻尾を動かしていたが、「こちこち」と鳴いて逃げていった。「ひんこつ」が、まだそこに居るようにあるよ、というのである。

百田宗治は、「『まだそこにをるごとあるよ』が庄巻である。あ

まりに生き／＼と木の枝で尻尾を動かす鳥を見たので、そして奇妙なその啼き声がまだ耳朶に残つてゐるので、まだその枝にゐるやうに見える―その間髪を容れない天意の表現に、吾々もまた飛び去つてなほ枝に残る一匹のせきれいを眼のあたり見る思ひがする。童心的な詩的表現の―典型ともいふべき快心の作である。」と言つてゐる。その通りであるう。

木村寿は「この子は、山一つ越した一軒屋に静かな生活をしてゐる子供であるから、詩には、いつも、自然の微妙な相をとらへてゐる。」と言つてゐる。

なお、百田宗治は「ひんこつ」をセキレイ(鶺鴒)と言つてゐるが、「ジヨウビタキ」のことである。土々呂には多い鳥で、庭先などによく飛んでくるといふ。「しろんばち」は「尻尾」である。

『日本児童詩集成』(昭和三十一年 河出書房)では、「ひんこつ」は「ひんしつ」といふ題になつてゐる。『日本の子どもの詩宮崎』も「ひんしつ」としており、『日本児童詩集成』を踏襲したものとと思われる。むろん、間違いである。

がちよ

中野辰夫

がちよをもどかしたら、
きもんに
がぶつとくひついた、
にげると
くびをなげにして
おうてくる、
おりはおしくなつてにげた。

これも『ひかり』第十号の作品だが、最終行「おしく」は「おじく」である。文集では濁点が鮮明でないので、「おしく」という方言だと誤解されたのだから。「おじくなつて」は「おじなつて」、つまり「恐くなつて」の意味である。「がちよ」は鶺鴒、「きもん」は着物、「なげにして」は長くして、である。百田宗治は「「もどかしたら」はおどろかしたらであらうが、或は筆者の誤りであるかもしれぬ。」と言つてゐる。「もどかす」は「からかう」くらいの意味である。

百田宗治は「これも事実を活写した精彩のある作品の一つ。」「四行目の『にげると』は最後の『にげた』と重複するから『かけると』位に改めた方がいゝと思ふ。」と言つてゐる。しかし「かけると」では雰囲気が出ない。最終行を「またにげた」くらいに改めるか、むしろこちらを「かけた」にする方がよいのではないか。

木村寿は「これは性格をよくあらはした詩で、この子供は、犬にでも猫にでもよく戯れかかる。それでゐて、相手が真剣になると、吃驚して退去する無邪気な、純朴な動作をしてゐる。」と、この子らしい詩だと言つてゐる。

やなぎ

齋藤 一

やなぎのめがでた、
とんぎつてゐる。
だんだんけんになつてゐる、
やなぎの枝は小さいひもだ、
あをい木のひもだ。

これも『ひかり』第十号の作品だが、最後の二行は「やなぎの小

えだは小さいひもだ あをい木のめのひもだ。」となっている。木村寿も文集通りに引用している。百田宗治は「前の三行は感覚の直截な表現であるが、後の二行は連想の絵画的な描出である。柳のよれてゐる小枝を木の紐だと云ったのである。」と、「小枝」という言葉を使っているから、雑誌に掲載される時に書き直されたのだろう。木村によると、「この柳は教室のすぐ東にあつて、いち早く春をつけてゐた。子供はこの柳をみると、もう春が来た様に、喜んでゐた。」という。

百田は前の三行を「児童の直截な感覚と表現が自然に云ひ廻しの無駄を省いてゐるのである。」とほめてゐる。

そうじ

齋藤 守

ろうかをふいた、
ろうかにかほがうつつた、
しきやらふいた、
手やらうつつた、
はしらやらのごたりした、
かほがうつつた、
とこんまやらふいた。

廊下、敷居、柱、床の間と拭いて、いずれも顔や手が映るほどにぴかぴかに磨き上げられてゐる。

百田宗治は「この学校の作品は何れも生氣があつて、その上比較的様態主義の踏襲が少い。指導者に偏見のない証左でもあらうか。」と言つてゐる。事実を見つめ、観察させる指導だからである。

とんび

花岡福美

とんびがまひながら
くるつとかやつた、
日の光がとんびにひかつた、
とんびがまばいかつた。

『綴り方倶楽部』昭和九年二月号に掲載された作品である。百田宗治は、「幼稚な書き方がよい。」とほめてゐる。シンプルな表現と
いう意味だろうか。（既出）

あかちゃん

花岡福美

うちのあかちゃん
やはらしくわらふ、
ほくでもいくと
ほやつとわらふ、
ぼくはちよつと
ほたんにあたる、
やはらしいほたんだよ。

赤ちゃんの柔らかい頬を歌った詩である。「やはらしくわらふ」や「ほやつとわらふ」の表現が良い。赤ちゃんの柔らかさ、赤ちゃんを可愛く思う気持ちが良く出てゐる。

百田宗治は「作者の動作と表現と、それからその観察とがいかにもぴつたりと一つになつてゐる。「やはらしく」は程よく、やさしくなどの意であらう。「ほやつと」はぼんやり、にこつと位、「ほ

たん」は炬燵或は湯たんぼらしいが、こゝにも「やはらしい」が出て来る。とりいで、才能らしいものもない作品のやうであるが、優しい心情がさながらに感じられてよい。」と言っているが、「ほたん」は「ほつぺた」である。「ほたん」が「こたつや湯たんぼ」では意味が通じない。「ぼく」は指先で、ちよつと赤ちゃんの「ほつぺた」にさわってみたのである。すると柔らしい頬だったのだ。「ほたん」の意味が分かれば、百田宗治も「とりいで、才能らしいものもない作品」とは言えないであろう。

これは『ひかり』第十四号の詩だが、同号に吉井己義の「あかちやん」が載っている。

あかちやん

うちのあかちやん

うまくあゆむよ

人がわらふと

りよう手をふるよ

ほやほやわらふよ

ほたんがうごく。

吉井己義

赤ちゃんが「ほやほや」笑うと、「ほたん」が動くのである。炬燵や湯たんぼが動くわけではないから、「ほたん」は「頬」である。「ほやほや」笑う、「ほやつと」笑うは、土々呂の地域的な表現なのかも知れない。

ふな

風がすこし吹く日

ふなが川の中およいでゐる、

ぬくかつた、

しりほんばちをうごかして

げんき出しておよいでゐる。

高橋忠雄

何月に書かれたのか分からないが、恐らく、寒くなってからの事だろう。風も少ししか無くて暖かい一日。暖かいので、川の中の鮒も元氣を出して、尻尾を動かして泳いでいる、というのだろう。百田宗治は「三行目の『ぬくかつた』は季節的で長閑な日当たりの感じを含んで、これも適宜な表現である。」と言っている。

かほ

かがみにうつつた

ほくのかほが

おかしいよ、

目の下の、

こまいとき

けがしたきずが

おかしいよ。

戸松義夫

百田宗治は「珍らしくユーモアのある作品である。多少ふざけて書いたものかも知れぬが、『目の下のこまいとき けがしたきず』がそのユーモアを落着いたものにしてゐる。」と述べている。

しかし「おかしいよ」というのは滑稽だという意味だろうか。幼児の時に怪我した傷跡を見て、「変だよ」と心配しているのはいのか。百田は「『をかしいよ』は意味のハツキリしない言葉だが、この意味のハツキリしないところがそのユーモアに味を持たせてあるのだと思ふ。」と言うが、自分の顔が、傷跡がおかしいと、ユーモアで言っているとは思えない。

松の木

梶井 清

松の木が
みぞごにうつる、
松のきのおとがする、
お日さまが
松の木のあひだにうつる。

『綴り方倶楽部』昭和九年一月号に掲載されている。「みぞご」(溝)に映った松の木を描いた児童詩は珍しい。(既出)

つばきのは

高瀬 学

つばきのはが
風にふかれて、
つばきのはは
道のまん中に
かげをうつらかしてゐる。

『綴り方倶楽部』昭和九年三月号に掲載された詩である。百田宗

治は『道のまん中にかげをうつらかしてゐる』椿の葉、ちよつと思ひつきさうで思ひつけない状態である。」と、その独自性を指摘している。(既出)

(四) 『佳い綴方』

雑誌『佳い綴方』を見ることは出来なかった。詩集『土々呂の詩3』には、「一、二年の時の詩」という欄があり、全国誌に掲載された詩が集められている。そこに『佳い綴方』に掲載された作品、八篇を見ることが出来る。掲載年月日は、はっきりしない。

お日様

川名信一

お日様が
松の木の間から
光つてきます
目がぴかぴか
まばいです

(よい綴方、四月号)

菊池知勇は「松の葉の間からもれてくる光をとらへたので美しくまぶしいお日様があらはれてゐます。」と評している。

しかし、ただ光が松の木の間から漏れてくるのではなく、恐らく海の方から朝日が昇ってくるのである。その太陽の光が松の木の間から差ってきてまばゆいというのである。二年生の詩で、『土々呂の詩2』(昭和九年三月)に収録されている。(以下、「風」まで同じ)

お日様

戸松愛明

お日様が

ふとんの中にへつて

ふくらけて居る。

(よい綴方、昭九、四)

ふとんを干しているのだろう。それをお日様が布団の中に入り込んで、ふくらかしているというのである。

菊池知勇は「ふとんのわたをふくらけてゐるお日様をうたつてお日様のあたゝかさをかんじさせてゐます。」と言っている。

お日様

齊藤守

たんぽこ

こほりがとけてしもち

水がちらちながれる

お日さま

ながれてゐる

(よい綴方、昭九、四)

菊池知勇は「水がとけた田圃の水にお日さまを見たのがよい、お日さまの光がさざなみにながれてゐるのもよい。」と言っている。「水がながれる」「お日さまがながれる」という対句的な発想が良い。「とけてしもち」は「とけてしまつて」。

風

木村隆

空を風がふく

とんびが風からおしてもらつてゐるとんびはただかじをとるばかりだ

気流に乗ったとんびの動きを、そのまま、とらえている。菊池は「とんびが風におしてもらつてとんでゐるやうに見えるところをうたつたので空高く吹いてゐる風がかんじられます。」と言っている。

雨

高見茂夫

青い水たまりに

雨がおちてゐる

ぱちりととぶ

ぱちりととぶ

水たまりにいつぱいとぶ

青い水たまりが

白く光つてきた。

雨の中の「青い水たまり」がどういふ情景なのか、よく分からないが、菊池知勇は「水の上ではねかへつてゐる雨をうたつたのがとてもおもしろい。生き生きしてゐる。」と評価している。

この詩以下は、すべて『土々呂の詩3』（昭和九年六月）の中の詩である。

ももの花の雨

黒木重行

ももの花に

雨がしづかにふつてゐる

きりがいつばいでてゐるが
ももの花のぐるりはあかるい

霧の中に薄ぼんやりと明るさを持つ桃の花ということなのだろう。
菊池知勇は「桃の花のぐるりの明るさをうたつたのがよい。」と、
ほめている。

つばめ

松永行雄

電しんせんにとまつてゐたつばめ
弓から矢がとぶやうに
一すちにとんでいった

ツバメの「矢のような」飛び方を的確に捉えている。菊池知勇は「とびだすつばめをうたつたもの。弓から矢がとぶやうにとは、よく見たものである。」と言っている。実際に矢を射るところを見る機会があつたのだろうか。

燕

吉井己義

お宮の森の間から
燕のとぶのを見た
空の中にすちをいくつもつくつてゐる
すちの中から
こゑがひびいてくる。

ツバメの飛び方の特徴を捉えている。菊池知勇は「燕が空の中に

すちをかいてとんでゐるとは面白い。そのすちからこゑがひびいてくるとは更におも白い。」とほめている。

(五) 『工程』と土々呂の詩

『工程』の編集発行者は、百田宗治である。

創刊は昭和十年四月、木村寿がちようど土々呂小学校から門川小学校へ転勤になった年である。したがって掲載されている土々呂小学校の作品も、昭和九年当時、三年生の時のものである。

創刊号には「児童文の新採点」の欄に、吉井己義の綴方「かばん調べ」が載っている。これを井伏鱒二が批評しているのだが、これについては別途述べることにする。

第一巻第二号（昭和十年五月一日）には、「指導者別児童詩」欄に、木村寿の指導作品が取り上げられている。

※第一巻第二号

木村寿指導 宮崎県土々呂小学校 尋三

もう四年

吉井 己義

もう四年だから言ふことを聞け
笑ひながらしかる兄さんのかほ
さんじゆつはむつかしいかもしれぬ
とく本はどんなだらう
思つて、みてゐる道を
つつじをのせた自転車
するりと通つた。
山はもう春かな

僕は四年生になるんだ。

すもとり

ひろしちやん方の後に
すもとり花むらさき色。

すもをとらせてみたいが
一つかないよ

つぼみは五六本

風にふかれてゐる。

ひらかんとすもはとらせない。

ぶた

ぶたをうつた

さむしかつた

とうとう

うられた

はみくはせたら

ふうふうとないたが

とうとう

うられてしまった。

山の上から

山に上った。

汽車がはしつてきた。

花岡 友美

汽車の中に人がはいつてゐる。
みんな手をたたいた。
汽車のけむりが
松の木の
うようよしてゐる。

甲斐 忠臣

これらの詩が『光』の何号から採られたものかは分からない。二十号、二十二号、二十三号が失われているからである。『工程』第二号には、「文集探点」欄に「『光』もとうとうこの号で廃刊になるらしい。」とある。吉井己義の詩が「もう四年」という題であることも考えると、最終号から採ったものなのかもしれない。『工程』昭和十年十月号では、特集号として「全日本児童詩集」が編まれている。宮崎県からは土々呂小学校的作品のみが収録されている。

※昭和十年十月特集号 特集 全日本児童詩集
宮崎県土々呂校（木村寿）の尋二の子供たちの詩
お日さま

戸松 義夫

お日さまが

ぼくの内に一ぱい

ふとんの中へへつて

ふくらけてゐる。（土々呂の詩）

見山幸夫

「佳い綴方」昭九年四月号に掲載された詩である。（既出）

お日さま

戸松 義夫

お日さまがぬくいよ、
日本中の子供も
ぬくいだらう。

(土々呂の詩)

小春日和か。土々呂が暖かな一日だと、日本国中が暖かいと、子どもは思うのだろうか。他県の子どもにまで想いが及ぶところが、子どもらしいようで、子どもを脱している。

草のめ

吉井 己義

くろくなつてゐる
土をとつた道に
草のめがならんでゐる。
みんなお日さまに光つて
いきをしてゐる、
山でうぐひすのこゑがする。

(土々呂の詩)

芽生えである。草の芽が光に当たって息をしているという捉え方が、子ども離れしている。最後の一行は、『赤い鳥』調である。

はる

甲斐 守

はるがきたから
だいこんの花がさいちよる
といつた、

うちのさかえが

だいこんの花をとつて
こりが春かといつた、
僕は春ちやといつた。

(土々呂の詩)

兄弟なのだろう。春をめぐる兄弟の間答である。大根の花に春を見た兄に、弟(妹)が花をとつて「これが春か」と聞く。兄は自信を持って「春だ」と言い切る。良い詩である。

目白

高田 武

めじろが
山で
ちぢないてゐる、
ぼくのめじろも
かごの中で
ちぢないてゐる、
山にいつてなきたかるな。

(土々呂の詩)

子ども心にも、籠に入った鳥は可哀想なのだろう。目白は互いに鳴き交わしながら近づいて来る。目白をよく知った子どもの心である。

附記によると、「全日本児童詩集」は「昭和九年八月から十年七月に及ぶ約一年間に刊行された全国詩文集登載の作品から採録したもの」とある。これによると、土々呂の子どもたちは三年生ということになる。しかし収録されている詩は、詩集『土々呂の詩2』か

らのもので、発行は昭和九年三月二十七日である。したがって確かに二年生の時のものである。「附記」に言うほど厳密に期間を区切って再録したわけでもないのだろう。

編集方針として、次のように述べられている。

「編集者は本詩集刊行の進歩的使命を完うするため為し得るかぎり児童の全生活的意欲の強く表はれた作品を本義とし、他面取材の多様性といふことを尊重した。然しながらも一方従来からの自然詩の系統を追った代表的の作品をも見落とさなかつた事を附記して置く。」

土々呂の子どもたちの詩は、自然詩であり、生活詩である。草の芽に生命を見、籠の鳥の心を思う。それは子どもたちの生活に裏打ちされた心であり、物を見る目である。

(六) 『綴方学校』と土々呂の詩

『工程』は、昭和十二年(一九三七)一月号から、『綴方学校』と誌名を変える。その昭和十三年五月号に、土々呂小学校の子どもの詩が二篇、吉田瑞穂の選で載っている。

※鑑賞児童詩選

吉田瑞穂

* 尋一

ア サ 日

アサ日ガビカビカヒカツテキル。
ウチノニハトリゴヤヲテラシテル。
ニハトリハ
ココココトヨロコンデキル。

久 峨 正巳(宮崎)

タマゴガ三ツコロゲテキル。
タマゴハシロイ。

アサ日ニ ピカピカヒカツテル。

『ひかり』第八号に載っている詩である。文集の詩は「くテキル」が「テキタ」と過去形になっている。三、四行目は「ニハトリハココト ヨロコンデキタ。」と一行である。鶏の鳴き声も「ココ」と、三文字である。「ココココ」の方がリズムがあり、文末も「テキル」と現在形の方が臨場感がある。

吉田は「要旨」(作品の後に書かれている)の中で、「心が書けてゐる(鶏と同じやうに、朝日に触れておどり立つてゐる自分の心が)」と言っている。朝日に鶏も喜び、卵もぴかぴか光っている。良い一日の始まりである。

* 尋二

草 の め

戸松 義夫(宮崎)

はだしであるいてゐたら、
足がちよこばいかった。
下を見たら 草のめをふんでゐた。
手でおこしたら、
やはらしい草のめだった。

・ちよこばいかった||くすぐったかった
・やはらしい||やはらかい

『土々呂の詩2』から採った作品である。やはり書き直されている。原作は、次のようになっている。

草のめ

戸松 義夫

はだしであるいてみたら、
足がちよこばいかつた
下を見たら
草のめをふんついでみた
手でおこしたら、
やはらしい草のめだよ

これは原作の方が良い。特に最終行は、「やはらしい草のめだよ」という柔らかい言い方が、草の芽の柔らかさと合っている。吉田瑞穂は「『下を見たら』『手でおこしたら』がやゝわざとらしい印象を与へる。この二行を省いて読んで見る。この二行にはやゝ知的な構成の意志が働いてゐる。」（『要旨』）と言っている。書き直された経緯は分からないが、「やはらしい草のめだった」と過去形にすることで、余計に「知的な意志の構成が働いたものになったと言えよう。」

前述したように、「草のめ」は『土々呂の詩2』掲載の作品だが、吉田瑞穂は雑誌『綴方行動』でも『土々呂の詩2』をとり上げて批評している。

二、「土々呂の詩」への評価

生活行動詩的観点から

『綴方行動』という雑誌がある。創刊は昭和九年七月、吉田瑞穂や入江道夫を中心とした研究誌である。東京市第三大島小学校の校内研究誌で、当初はガリ版刷りであった。その創刊号に、吉田瑞穂は「木村寿の『土々呂の詩を読む』という批評文を書いている。ここで言う「土々呂の詩」とは、詩集『土々呂の詩2』のことである。『土々呂の詩2』は、昭和九年三月に発行された詩集である。表紙には「ひかりの子作・四十九人集 宮崎県土々呂校二の一」とある。現存する『土々呂の詩2』は、子供たちの鉛筆書きの自筆の詩集である。一ページが十二行に仕切られ、一行目に瞻写刷り独特の青い字で「宮崎県東臼杵郡土々呂小学校・尋二の一」と印刷されており、その下に氏名を書くようになっていた。二行目は題名を書く欄で、二行分の幅を持っている。これが手製の原稿用紙らしい。その原稿用紙一枚に一作品を鉛筆で書き、それを綴じたのが『土々呂の詩2』である。したがって『土々呂の詩2』は一冊しかないはずであるが、その中の作品が『佳い綴方』や『工程』に載り、吉田瑞穂も読んでいるとなれば、他に瞻写版刷りの詩集があったことになる。逆に言えば、全国に配った瞻写版刷りの詩集とは別に、木村寿は子どもたちの手書きの原稿を綴じて「土々呂の詩・2」の表紙を付け、自分用のただ一冊の詩集を作ったということである。それが今日残っているただ一冊の詩集なのである。これには当然のことながらページが打っていない。

吉田瑞穂は、まず、「低学年の詩集として、現日本で特に光ったのが二つあると思ふ。僕はつねに、此の詩集に教へられてゐる。一

は南国宮崎の木村寿君の『土々呂の詩』であり一は北国・秋田の佐藤俊吉君の『子もり』である。」と述べている。『土々呂の詩2』は、吉田瑞穂から「現日本で特に光った」詩集という評価を受けているのである。

では『土々呂の詩2』の何が吉田をして「僕はつねに、此の詩集に教へられてゐる。」と言わしめたのか。

吉田瑞穂は、子どもの書く詩は「詩的感動イクワール言葉といつても差支ないと思ふ。」と言う。「子供の詩に於ては、詩的感動が、文字に植ゑつけられる時、その感動が、自然的に、言葉となり、文字となつて客観化される。即ち作品『詩』となる」からである。大人の場合はその技巧が入るが、子ども、特に低学年の子どもの場合は、詩的感動がそのまま作品となる。したがって「指導者が、子供の詩的感動を、もつともすなほに表出させようと意図してゐる場合に於ては、作品が千変万化・各オリヂナリティーを具有してゐる」ことになる。吉田瑞穂にとつて「子供の詩」とは、詩的感動がストリートに言葉となつたものであつた。吉田が、『綴方学校』の「鑑賞児童詩選」で戸松義夫の詩「草のめ」を「『下を見たら』『手でおこしたら』がやゝわざとらしい印象を与へる。(略)この二行にはやゝ知的な構成の意志が働いてゐる。」と批評したのも、この考え方に基づくものである。吉田の目から見れば、「草のめ」のように、やや「知的な意志の構成が働い」た面もあるとはいへ、木村寿の指導は、子どもの詩的感動を最も素直に表出させようとしたものである。その結果、土々呂の子どもは実に様々な事柄を詩の対象とし、その詩がそれぞれに独自性を有していると言うのである。

吉田はその例として「め」を挙げてゐる。巻頭の詩である。

め

草のめ

土にうだかれてでてゐる

わずか二行の詩だが、草の芽が「土に抱かれてゐる」という発想が、大人には出来ない。子どもにはそれが自然に湧いてくる。吉田瑞穂は「子供の感受が如何に新鮮であるかがわかつてもらへると思ふ。」と言っている。子どもの詩にこのように表現されると、生命は大地から生まれ、大地に育まれ、大地に守られてゐるということに改めて認識させられる。

吉田は「その他にも、感受の新鮮さを示す作品は多い。」と言ひ、「松の木の風」を引用してゐる。

松の木の風

戸松義夫

松の木が

ごうといつて

向ふからくる

おとがだんだんくる

僕たちの前を通つて

向ふへはしつていく。

「音がだんだんくる。……平凡のやうであるが生々とした感受である。」と吉田は言つてゐる。松の木の音が向こうから来て「僕たちの前を」通り、向こうへ走つていく。子どもの目には、そのように見えるのだろうか。吉田の言う「子供の感受生活の新鮮さ」であ

る。

次に吉田瑞穂は、土々呂の詩が「自己の行為性を多分にあらはしてゐる」点について述べている。「即ち詩のモチーフに人間の生活的な心情がある。広くいふと人間の生活（主として行為性）がある。」ということである。

つばき

花岡友美

つばきをとらうと
僕はにぎつてゐる
木がゆれてゐる
みつがかほにおちた
ねばるやうだ
枝をおつたら
くわふんが
着物のえりにはいつた
からだの中にはいるやうに
ちめたかつた

*筆者注

原作では、一行目が「つばきをとらうと」、七行目が「くわふんが」である。

吉田は、「つばき」（花岡友美）と「風」（木村隆）を例に挙げ、「この詩集の中の詩は、冷徹的態度で、自然を裁断するといふやうな、旧来のマンネリズムがないのは、勝利であると思ふ。而して、詩に子供の行為性を要求してしてゐるには敬服の外はない。」と

述べている。いわゆる生活行動詩的観点からの評価である。

このことについて弥吉菅一氏は、「日本児童詩の歴史的研究第3巻」（深水社）の中で、次のように述べている。

この評文の中に「行為性」が三回も出てくる。その中でも「詩に子どもの行為性を要求してゐるのには敬服の外はない。」というコトバに、わたくしは驚かされたのである。なぜか。「綴方行動」の「行動」というコトバが生まれる前哨戦であり、原形ではなかったか、と。（略）

この詩は、今からみて、それほど、優れているとは思えない。だが、白秋の自由詩と対比してみると、「つばきをとらうと」僕はにぎつてゐる」とか、「枝をおつたら」などに見える「行動」を、吉田は鋭く「行為」というコトバでとらえ、「行為性」と評してゐる。この「行為性」という吉田の発見にわたくしは注目したい。（二六四頁）

生活行動詩は妹尾輝雄が「生活行動詩への意図と実践」の中で提唱したものである。

「従来の写生詩がとかく静止した眼での平面観照だったのにたいして、これは行動する眼での立体的観照を要求する。また、従来の童詩によく付随していた概念的な詠嘆を廃して、あくまで現実行動にともなつて醸成される感情を尊重しようというのである。この標識を明確にするために、かかる態度の詩を、あえて『生活行動詩』と呼ぶのであるが、実は従来の写生詩を生活詩として新生させようとするものに他ならないのであることを了解して頂きたい。したがって、こうした生活行動的な観照態度の萌芽、傾向を従来の写生詩の中より探し出すことも難しいことではない。」

(青銅社『児童生活詩の理論と実践』による)

これによると、「行動する眼での立体的観照を要求」したものの、すなわち「現実行動にともなう醸成される感情を尊重し」た詩が生活行動詩である。

弥吉氏は、「生活行動詩への志向時代」を昭和十年頃から十五年頃までとしているが、その理由を「昭和十年頃からしたのは、昭和九年五月、東宛書房刊の『新童詩の理論と指導実践工作』(『綴り方倶楽部』臨時特集号)のなかに、妹尾輝雄の『生活行動詩への意図と実践』という論文が所収されていたからである。」と述べている。『綴り方行動』は同年七月の発行である。弥吉菅一氏は、時を経ずして書かれた吉田瑞穂の批評に「行為性」という観点を見出し「驚かされた」のである。そして吉田瑞穂は、更にそれ以前の同年三月に発行された『土々呂の詩2』を読んで、そこに「行為性」を見出し、「敬服の外はない」と思ったのである。吉田は「『草のめ』『よみ方』『つばきのみつ』等々、佳作を拾ふに暇なき位である」と述べている。

よみ方

よみ方の時間

僕の番になった。

かほが、ぬくくなつて、

本をよみはじめた。

足もとに何かおつて、

僕をびくびくさせるやうにある。

よんでしまつたら、ほつとした。

黒木重行

お父さん

僕のお父さん

このさむいのに

えきで、にもつをかかへてゐる。

僕はたんぶのわきに立つて

お父さんが、にもつをかかへて

あつちに行くのを見てゐる

中野辰夫

吉田瑞穂が佳作として挙げているこの詩などは、妹尾輝雄が言う従来の写生詩、「静止した眼での平面観照」的な側面は全くない。「あくまで現実行動にともなう醸成される感情を尊重し」た生活行動詩と言つてよい。「こうした生活行動的な観照態度の萌芽、傾向を従来の写生詩の中より探し出すことも難しいことではない」(妹尾輝雄)にせよ、木村寿の指導作品は、吉田瑞穂が敬服するほどには充分時代の先端を行っていたのである。

『綴り方行動』の同人である入江道夫は、「児童自由詩とリアリズムの実践」(『綴り方倶楽部』昭和九年五月)の中で、「従来『無風流』だとして来た事の中に、新しい詩の生きる素材を発見しなければならぬ。自分を観る場合に社会とのつながりに於いて観、自分を描くことの中に社会を描くといふ批判的態度に生きなければならぬ。自然を描写することによつて社会を描写する態度に徹しなければならぬ。」とし、木村寿の指導作品「お父さん」をその例として挙げている。そして「次の如き作品が新童詩の展望の前に実践的ならはれて来つつあることは、大いに注目すべきである。」と述べている。

「労働とのつながりなしに見、考へ知り得る父が、現実中存在するものでない。我々は今後に於て、此の新しい観点を積極的に取上げることによつて、児童の詩をもつと解放してやらなければならない」（入江道夫）

木村寿の指導作品は、吉田瑞穂だけではなく、入江道夫によつても新しい視点を持った詩として評価されているのである。

吉田瑞穂は最後に「子供らしい主知的傾向の萌芽」を指摘している。「かういふ傾向は子供の場合非常に警戒しないと嘖飯物になるおそれがあるが、土々呂の詩には、面白い作品がほの見えてゐる。」と述べ、「山ざくら」を例に挙げている。

山ざくら

神様かざった

山ざくら

花がたくさんついてゐる

お日さまの光がはいつてきて

みんなの花を

ひからせる

小泉光明

神様に供えた山桜を、お日様の光（人間の力を超えた存在）が入つてきて花を光らせるというところに、「子供らしい主知的傾向の萌芽」を見るところであろう。それが萌芽に止まっている故に、「面白い作品」になり得ているのである。

吉田瑞穂は「木村君から批評をたのまれたが、批評どころのさわぎぢやない。すつかりこちらが感心してしまつてゐる。」と言ひ、

「ほんの少しだが、行の終りに『よ』をくつつけてゐるのが如何にもマンネリズムに感じられる。不必然に『よ』を要求すべきではない。」と付け加えている。「よ」に『赤い鳥』の名残を見ているのである。

吉田瑞穂の「よ」批判は、『赤い鳥』から「生活綴方」へという歴史的流れの中での懸念であつて、個々の作品において「よ」を使うべきか否かの問題ではない。前述したように、「草のめ」では「よ」は効果的に使われている。したがつて木村寿が『赤い鳥』調を目指していたわけではない。しかし木村寿が北原白秋の影響を受けていることは確かである。吉田瑞穂はそれを鋭く感じ取っていたのである。

付記 本稿は「宮崎県児童詩教育史」の第六部をなすものである。

（二〇〇四年九月三〇日受理）